

草創期ヴァルドルフ幼稚園の設立経緯に関する考察

—E・M・グルネリウスを中心に—

A Historical Study of the Negotiation about Early Days of Waldorf Kindergarten

—Focus on a Teacher called E・M・Grunelius—

近 藤 千 草
(Chigusa, KONDO)

1. はじめに

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner 1861-1925 以下、シュタイナーと示す) が創設した「自由ヴァルドルフ学校」(Freie Waldorf Schule)¹は、ヴァルドルフ・アストリア工場主であるエミール・モルト (Emil Molt 1876-1936)²の依頼により、1919年9月7日、ドイツのシュツットガルトにおいて開校した。自由ヴァルドルフ学校の設立経緯に関する社会的背景や教育の根底を貫く思想や哲学、人間の発達に基づく教育の内容や方法、また教育を支える教員のための教育講座等³については、シュタイナー自身による著作や講演録、シュタイナー研究者による学術論文等を通して知ることができる。自由ヴァルドルフ学校は初等中等教育機関に相当するが、シュタイナーは、人間としての最初期の発達段階に相当する乳幼児期の教育についてより一層重視している。そのため、シュタイナーは幼稚園を設立することも同時に望んでいたのであるが、幼稚園が設立されたのは、シュタイナーの死 (1925年没) 後の翌1926年のことであった。シュタイナーの著作や講演録の中では、乳幼児期の発達特性や発達に即した支援・教育のあり方等について触れられている。今日でもシュタイナーの発達論や幼児教育論の学術論文や研究書は見られるが、幼児教育を展開したヴァルドルフ幼稚園 (Waldorf Kindergarten)⁴の設立経緯や、当時の幼稚園の実態に関する状況、またそれらをまとめた学術研究については世界的にも少なく、草創期におけるヴァルドルフ幼稚園に関する調査があまり進められていないのが現状である。

我が国において草創期のヴァルドルフ幼稚園について知ることのできる代表的な研究論文は、杉岡 (2016)⁵が論考中で取り上げるように、最初のヴァルドルフ幼稚園の設立者であるエリザベス・グルネリウス (Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius 1895-1989 以下、グルネリウスと示す) が著した論文、Early Child Education & the Waldorf School Plan. 1950、「国際シュタイナー/ヴァルドルフ幼児教育協会 (IASWECE)」の代表であるスーザン・ハワード (Susan Howard) による論文、The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Our Waldorf Early Childhood Movement. 2005、シュタイナー教育の研究者であるペーター・ラング (Peter Rang) の著書、Waldorf Kindergartens Today, 2013、である。我が国におけるヴァルドルフ幼稚園に関する研究

は、遊びや保育内容、指導方法等に関する研究が多い傾向にあり⁶、草創期のヴァルドルフ幼稚園に関する経緯や実態に関する研究・論考は、筆者が先行研究の整理を試みた限りにおいて、杉岡(2016)の「シュタイナー幼稚園の黎明期」のみである。杉岡(2016)は論考の中で、草創期のシュタイナー幼稚園について記されてある論文を7本挙げ⁷、論中では黎明期に触れられている論文4本⁸を用いてその実態を明らかにしている。論文の中で明らかにされたことは、グルネリウスが幼稚園を創設したプロセスについて、1914年から1919年と1919年から1926年の二期に分けて整理づけたこと、幼稚園創設当初のグルネリウスの幼児教育観と保育の特徴について模倣、想像的芸術力、感覚器官の観点で明示したことである。

このような研究の背景から、グルネリウスが創設したヴァルドルフ幼稚園の草創期により一層迫り、幼稚園の設立背景や歴史的経緯、幼児教育思想の根底や幼稚園創設に関わった人等、草創期ヴァルドルフ幼稚園を取り巻く様々な要素について詳細に調査することは重要な課題と思われる。そこで本稿では、草創期に関する未踏の調査課題の中から、ヴァルドルフ幼稚園の設立過程に着目し、設立に至る経緯を整理することから始めたい。このような作業を行うことは、今現在、世界的にも我が国においても施設の数量的、教育の認知的にも広がりつつあるヴァルドルフ幼児教育の意義を再認識していくための基盤として必要であり、その整理から今後の我が国で求められるヴァルドルフ幼児教育の方向性や在り方を考察する作業へと引き継がれることが可能になると考える。本稿では、研究方法として、草創期ヴァルドルフ幼稚園に関して情報を提供してくれる4つの論考、すなわち、① Susan Howard, *The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement*. 2005、② Peter Rang, *Waldorf Kindergartens Today*, 2013、③ E・M・グルネリウス、高橋巖・高橋弘子訳、1999、『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』、④ 杉岡幸代、2016、「シュタイナー幼稚園の黎明期」を用い、ヴァルドルフ幼稚園の設立経緯の整理を試みたい。

2. ヴァルドルフ幼稚園の設立過程

最初のヴァルドルフ幼稚園の設立者は、シュタイナーではなく当時24歳のグルネリウスであった。ヴァルドルフ幼稚園はシュタイナーが亡くなった翌年の1926年に設立されている。シュタイナーの存命中に幼稚園の設立は叶わなかったが、シュタイナーは幼稚園の設立に向けて自由ヴァルドルフ学校の設立と同時進行で考えており、特に誕生からの7年間における幼児教育の重要性を認識していたことが、ハワード(2005)の論考に見られる。

Once the first Waldorf School opened in 1919, Rudolf Steiner asked the teachers to free up a room for a kindergarten, but it was not possible. Finances were strained, and the faculty chose to use every available space for additional grade school classes. Later, in 1920 Rudolf Steiner spoke again with the faculty about the importance of the kindergarten: "It is true that it was

would be better if you could have the children in kindergarten. The longer you have them, the better. Thus you could admit children who are not yet old enough to come to school. ... It would be very nice if we could bring in some children in the first seven years of early childhood education. In the end, we must have them somewhat younger, it is much less important when they are older.”⁹

上記の文面から、自由ヴァルドルフ学校が設立した1919年から、シュタイナーは小学校教員に幼稚園のための部屋を開けてほしいことを依頼していたことがわかる。しかし、当時は財政が緊迫しており、幼稚園を確保することは難しかったようだ。翌1920年にも再度シュタイナーは、自由ヴァルドルフ学校に幼児を迎え入れたいこと、できる限り長期にわたって子どもを受け入れることが望ましいこと、上級学年の子どもよりも幼児期の教育が重要であること等、幼児教育の重要性について教員に語ってる。シュタイナーが自由ヴァルドルフ学校の小学校の学級を訪問した時には、“We need kindergartens! We need kindergartens!”¹⁰と叫んだことも記述されている。

さらに、1921年12月29日にシュタイナーは、幼稚園の必要性について教員に向けて次のように話している。

「ひとりの親として、あるいは何らかのいきさつから教育し、指導する者として小さな子どもの前に立つとき、人はその子どもに対して非常に大きな責任を感じます。この人間の全生涯に、理解をもって関わるができるのだと考えて、責任を感じるのです。シュツットガルトのヴァルドルフ学校では、子どもたちが義務教育の年令に達して初めて受け入れることができます。このことは私にとって、特別の痛みを伴うものです。自由ヴァルドルフ学校にもっと幼い子どもを受け入れることができたなら、私は深い満足を感じることでしょう。けれども、幼児のための学校を設立するには、さまざまな障害があります。その中でもいちばん大きな障害は、私たちの人智学運動のすべての分野が深刻な経済的困難を抱えているということです。この予算の深刻な欠如を考えると、もしヴァルドルフ学校が将来あまり多くの敵に遭遇せずに済んだら、そのうちこのヴァルドルフ学校に幼児も受け入れるようにしよう、と期待することぐらいしかできません。」¹¹

シュタイナーは、幼児教育の重要性を認識し続けており、乳幼児期からの子ども理解について様々な講演や著作の中で述べている¹²。幼稚園の設立を模索する中、シュタイナーは1914年にグルネリウスに出会う¹³。グルネリウスはこの時、ドイツのボンにおいて幼稚園教員養成課程を修了、“who had just completed her state kindergarten training in Bonn.”と示されている¹⁴。ボンの幼稚園教員養成課程とは、「コメニウス・幼稚園教師ゼミナール」¹⁵であり、本ゼミナールに通っていた事実については、Helmut von Kügelgen, Die erste Waldorfkinderkartnerin. Elisabeth von Grunelius (Erziehungskunst, 53/1989) S.1097に示されていると記述されている。また、グルネリ

ウス¹⁵の著書であり、我が国において高橋巖・高橋弘子により訳された『七歳までの人間教育シュタイナー幼稚園』（1999）では、グルネリウスが1914年に「コメニウス・ゼミナール」で児童心理学を専攻していたこと、シュタイナーの『神智学』を読んでシュタイナーに関心を持ち、シュタイナーを訪ねてスイスのドルナッハに行ったことが裏表紙の著者略歴部に書かれている¹⁶。この説明から、グルネリウスが自らの意志を持ってシュタイナーの元へ向かったことがわかる。つまり、シュタイナーの教育観や教育思想に共感的であったことが推察されるのである。1年半後（1915～1916年頃）には再びドルナッハに向かい、建設中のゲーテアヌム（Goetheanum）の建築を手伝っている¹⁷。その後、グルネリウスは、ドイツのベルリンにある「ペスタロッツ・フレーベル・ハウス」に学んだ。ハワード（2005）の論考には、ドルナッハに1年半滞在した（1915・1916年～1917・1918年頃）したと示されているので、1917年から1918年頃にベルリンに入ったことが予測される。しかし、杉岡（2016）によれば、グルネリウスは、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおいて1918年に教育指導者の資格を得ると述べられているので、1917年か1918年頃からの1年間で学修したことになるが、1年間の在籍で修了は可能だったのであろうか。ハワード（2005）の論考においても同様に、“Elisabeth stayed in Dornach for eighteen months, working on the woodcarvings and attending lectures by Rudolf Steiner, before resuming her early childhood studies at the Pestalozzi-Froebel Seminar in Berlin.”¹⁸と述べられ、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおける学習開始の前18カ月間（1年半）ドルナッハに滞在してゲーテアヌムの彫刻等を手がけたり、シュタイナーの講義を受けたりしたことが示されている。杉岡（2016）の論考では、「ボンの『コメニウス・幼稚園教師ゼミナール』で幼稚園教師のための教育課程を修め、その後、ベルリンの『ペスタロッツ・フレーベル・ハウス』で教育指導者の資格を得るための学びを持つ」¹⁹と示され、1918年に教育指導者の資格を得ているとしているので²⁰、「1年間で過ごすことになったベルリンでは」という表記から、1917年頃から学修を開始したことが推測される。このように、資料によっては、「後に」等の曖昧な表現が使われており、これらの資料から正確な経緯を捉えることは難しい。

グルネリウスの養成課程在籍年数に関し、1年であったのか否かこの時点で定かではないが、1911年にドイツにおいて幼稚園教師養成課程の国家規定「幼稚園教師と少年指導員養成のための、女子青年学校に編成された課程に関する諸規定」が施行されているので、法規にも触れながら在籍を検討する必要があるだろう²¹。また、グルネリウス（1999）及び杉岡（2016）の論考には、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスでの学びの間、グルネリウスは保育所や幼稚園（民間託児所、社会福祉事業）で働きながら学んだことも記述されており²²、ペスタロッツ・フレーベル・ハウスにおける養成内容と学びの特質との関連も考察する必要がある。

シュタイナーとグルネリウスが出会ってから5年後の1919年には、自由ヴァルドルフ学校がシュツットガルトに開校した。そして翌1920年に、幼稚園設立へと向かわせるチャンスが訪れる。それは、ドイツ新政府が、4月（イースター）始まりの学期制を9月へと変更したことにあった²³。シュタイナーは、この時にグルネリウスを思い出し、グルネリウスに幼児期の保育に関する計画書の作

成を依頼している。イースターから新学期となる9月まで半年間、シュツットガルトの自由ヴァルドルフ学校において、幼児クラスを担当してほしいことをシュタイナーは依頼した。グルネリウスは、この依頼に不安を感じていたことがハワード（2005）の論考中に示されているが、グルネリウスはシュタイナーの支援があればチャレンジしてみようと決意し、シュタイナーの依頼から一週間後に幼稚園が始まっている²⁴。「お試し」的な幼児クラスの保育は、自由ヴァルドルフ学校の教室（8年生クラス）で行われていたため、重たい机や固定された椅子が置かれ、床は黒く、保育を行うのには望ましい環境ではなかった。保育が行われたのは春から夏にかけての季節であったため、グルネリウスは幼児を外へ連れ出し保育を行っていたようである²⁵。グルネリウスが行った保育は、シュタイナーの言葉に即したものであり、一つは、「瞑想する」ことが保育の基本にあるということと、「模倣」によって働きかけるという保育に向かう姿勢であった²⁶。このような保育の捉え方は、これまで養成課程で学ぶことのなかった考え方とグルネリウスは認識している²⁷。この考え方の違いについては、グルネリウスが以前に学んだ「コメニウス・幼稚園教師ゼミナール」と「ペスタロッチ・フレーベル・ハウス」における養成内容を明らかにすることにより、一層明確になるとと思われる。

保育は9月に新学期が始まるまで行われたが、その後、1920年9月から1926年の幼稚園開園までの6年間について、幼稚園がいずれかの場所で続行されていたか否かは定かではない。しかし、ハワード（2005）の記述、“There was also ‘an overflowing deficiency of money,’ and still no real support from the class teachers.”²⁸という財政赤字の状況とサポート体制が構築されていない現状や、杉岡（2016）の「グルネリウスは教師のための大学に通いながら、1926年までシュタイナー学校の手仕事の教員やクラス担任の代わりとして働いた。さらに、グルネリウスは、健康を害した担任女教師のかわりに、2学年の担任に指名され、半分の主要授業を受けもつことになった」²⁹という記述があり、この6年間は保育は行われず、グルネリウスは小学校教育に参加していたことが予測されるのである。

1920年9月からおそらくグルネリウスが自由ヴァルドルフ学校の小学校教員として携わっていた期間中の1924年に、ヘルベルト・ハーン（Herbert Hahn）という小学校教師が、シュタイナーの呼びかけに応じて自由ヴァルドルフ学校の敷地内に幼稚園を建設する動きが生じる。シュタイナーの教員養成に関する著書（高橋巖訳）『ルドルフ・シュタイナー教育講座Ⅲ 教育芸術2 演習とカリキュラム』（Eraiehungskunst Seminarbesprechungen und Lehrplanvorträge）の248頁「訳者あとがき」の中で、「シュタイナーが自分の弟子たちの中から教育者として優れた人材を十二人選び、この新しい教師や関係者たちのために開いたのが、冒頭に述べた十五日間の講習会なのである。なお同講習会に参加した人たちの名は以下の通りである」と書かれ、その名前の中に「ヘルベルト・ハーン」が挙げられている³⁰。また、広瀬俊雄（2009）において、「すでに以前から煙草工場では人智学者ハーン（Herbert Hahn）博士による教養講座が開かれており」³¹と記述されている。幼稚園の設立を渋っていた教員の中で、開園を決意した点においてヘルベルト・ハーンは重要な人

物であると推察する。ヘルベルト・ハーンがシュタイナーのどのような点に共感し、幼稚園建設へと向かわせたのか明らかにしていくことも課題の一つである。そして園舎が完成したのは、1926年のことであった。ここに自由ヴァルドルフ学校の附属として、“The first “official” Waldorf kindergarten”³²が開園した。シュタイナーは1925年に亡くなっており、園舎の完成と開園を見ることができなかったのは悔やまれたことだろう。

幼稚園が開園した当時からの保育実践についてグルネリウス自身がまとめた、“Early Child Education & the Waldorf School Plan.” (1950) <邦訳版『七歳までの人間教育—シュタイナー幼稚園と幼児教育』(1981)>が出版されたのは、幼稚園が開園してから24年後のことであった。ここではグルネリウスが長年にわたり取り組んできた幼児教育について、「三十年以上におよぶ経験を通して、わたしには、ルドルフ・シュタイナーの述べたことの正しさが確認できました」³³と述べている。幼稚園の保育の基本や保育内容、設備等については、本書にて確認することができるが、1926年当時の幼稚園教員数や幼児数、子どもを預ける家庭層、管理体制、財政等、組織・運営等についてはわかっておらず、資料収集が必要である。グルネリウスがヴァルドルフ幼児教育として取り組んできた保育実践についての考察は、別項において試みたい。

幼稚園が開園してから3年後の1929年、ヴァルドルフ幼稚園の教員を目指すクララ・ハッターマン (Klare Hatterman 1909-2003 以下、ハッターマンと示す) がハノーバー (Hannover) からグルネリウスのもとにやって来る³⁴。ハッターマンはグルネリウスの同僚として共に働く仲間となる人物だ。ハワードは、グルネリウスとハッターマンがヴァルドルフ幼児教育運動の先駆者と見なしている³⁵。ハッターマンもヴァルドルフ幼児教育の展開においてキーとなる人物であるため、どのような人生を歩み、どのような保育実践を展開したのか、特にグルネリウスと共に保育実践に当たった1929年から1931年までの取り組みを紐解いていく必要がある。現時点でわかっていることは、1931年にハッターマンは出身地ハノーバーに「小さな幼稚園」を建てていることである³⁶。ベルガー (Manfred Berger) の論文、“Zur Geschichte und Theorie des Waldorfkinder Gartens”の中に、幼稚園での子どもの様子を示す写真が載せられている³⁷。ハノーバーには自由ヴァルドルフ学校もあったが、こちらの学校も財政難にあり、ヴァルドルフ学校とは別に幼稚園が創設された。小さな幼稚園として始まったが、10年後には20人の幼児がいたことが記されている³⁸。ナチスの占領下で、第二次世界大戦 (1939-1945) の最中にあったヴァルドルフ幼稚園は、1938年に閉鎖へと追い込まれたが、ハッターマンのハノーバーの幼稚園は1938年の閉鎖を免れている。

1932年にグルネリウスは、“Das Kind im Kindergarten der Freien Waldorfschule.” を著し、ヴァルドルフ幼稚園について紹介したが、1938年にはナチスによる幼稚園の閉鎖に追い込まれる。1940年にはアメリカへと渡り、そこではマイリン (H・A・W・Myrin 1884-不明) より依頼を受け、ペンシルバニア州のキムバートンにあるマイリンの農園にヴァルドルフ学校と幼稚園を創設した³⁹。後には大学も創設している⁴⁰。マイリンに関してニューヨークタイムズ紙が取り上げている記事が残っており<ニューヨークタイムズ (The New York Times) 1972年1月4日

PHILADELPHIA, Jan. 3 (AP) >、その記事によればマイリン氏 (H.A.W. Myrin) の妻が亡くなったことと、妻の功績について、次のような内容が書かれている。すなわち、「マーベル・ピュー・マイリン夫人は、太陽石油会社の設立者であるジョセフ・ピューの娘で、今日、ランケナウ病院で亡くなった。82歳で、キムバートン在住。マイリン夫人はキムバートン農学校を設立した H. A. W. マイリンの未亡人である。彼女は、プリンマー大学と旧フィラデルフィア大学に通っていた。マイリン夫人は、ここ長老派の病院、アデルフィ大学、アーサイナス大学の役員であった」ということである⁴¹。

本記事には、「キムバートン農学校 (Kimberton Farms School)」と記されており、「ヴァルドルフ」の文字は見当たらないが、グルネリウスが設立した「マイリンの農園のヴァルドルフ学校」を指していることが推察される。記事に幼稚園のことは触れられていないが、ハワード (2005) が、“she opened a kindergarten at the Myrin farm in Kimberton, Pennsylvania, as the foundation for new Waldorf school.”⁴²と示していることから、キムバートン農学校に幼稚園も設立したことがわかる。

H. A. W. マイリンについては、マイリン社のホームページ「The Myrin Institute」にその業績が示されている⁴³。マイリンは、国際的なビジネスマン及び博愛主義者であり、内科医であり作家でもあるフランツ・ウインクラー (Franz E. Winkler) と1953年に非営利団体のマイリン社 (The Myrin Institute) をマサチューセッツ州のバーリントンに設立している。マイリン社は、科学者、教育者、政策者、経済学者、宗教者その他主導者のためのフォーラムとして始まった。1954年、マイリンは、近代科学と現代人にとって最も必要な精神的世界の概念との和解を願い、和解のために破壊的なイデオロギーに対する保護や、恒久的平和を守ることについて、人間の自由の哲学による方法を用いて開かれるべきとの願いを述べている。その後マイリン社は、刊行物の発行やモデルプロジェクトのスポンサーを務めている。また、短大、大学、公的なサービス団体、企業、宗教的な団体、環境保護団体などの広範囲にわたる事業の推進者として奉仕した。

マイリン社は1982年に、「Orion Nature Quarterly」という季刊誌の刊行し、現在は「Orion」と改称され、人間が地球に対する倫理規範の管理責任者として、いかに発展していくべきかを考えさせる雑誌として注目されている。この刊行物の高い評価の成果として、「The Orion Society」が1991年に設立され、1997年には3機関に分化された。組織の活動は広がり、600以上にわたる地方の環境団体「Orion Grassroots Network」やアメリカの薬物教育に対する主導などが挙げられる。こうしたマイリンの活動の根底には、芸術、宗教、民族的な価値を重要な資源と認識し、洞察的な思考や分析的な探究をバランスよく働かせる志向があった。このような志向にグルネリウスはシュタイナーの教育思想や人間認識を重ね合わせ、ヴァルドルフ幼稚園の設立に向かったのではないかと推察する。

1940年からグルネリウスがアメリカに渡りマイリン農場にヴァルドルフ幼稚園を設立していた頃、1941年にハッターマンのハノーバーの幼稚園がナチスにより閉鎖された。ハッターマンはドレ

スデンへ逃れ、ドレスデンにおいて地下室に小さな幼稚園を作った⁴⁴。ベルガーの論文“Zur Geschichte und Theorie des Waldorfkinder Gartens”の中に、ハッターマンがドレスデンにおいて幼児と共にいる写真が残されている⁴⁵。それから5年後の1946年に、ハッターマンはハノーバーに戻り幼稚園を再開するが、幼稚園は戦後の荒れた環境下に置かれており、保育実践の中で石や枝を拾ったりする遊びを取り入れながら、幼稚園の園舎の補強につなげられるような取り組みも行われた。戦後の困難な状況下において、人智学の観点からヴァルドルフ幼児教育を学ぼうとする取り組みも芽生え始め、1950年にハッターマンは、他の幼稚園教師と共に学ぶ集会に招待され、子どもの発達や模倣力、感覚器官としての子どもの捉え方や輪廻転生といった考え方について、多くの質問がハッターマンに寄せられながら学びを深めていく機会を持った⁴⁶。このような集会での学びが、1969年の「国際ヴァルドルフ幼稚園協会」の設立へとつながっていくことになる。「国際ヴァルドルフ幼稚園協会」は、現在「国際シュタイナー/ヴァルドルフ幼児教育協会 (IASWCE)」として組織され28カ国が加盟している。当協会では、多様な文化における新しいシュタイナー教育のあり方を探ると共に、世界各国の教員養成、幼稚園設立プロジェクトを支援している⁴⁷。

荒れた環境下にあったハッターマンのハノーバーの園舎は、1953年に新園舎となった⁴⁸。アメリカに渡ったグルネリウスは、キムバートンに続き1948年、ロングアイランド州ガーデンシティにあるアデルフィ大学 (Adelphi University 1896-) ⁴⁹に招かれ、ヘルマン・フォン・バラヴァレ教授と共にヴァルドルフ・モデルスクールとその附属幼稚園を創設した⁵⁰。バラヴァレ教授は、グルネリウスがヴァルドルフ幼稚園における教育実践の集大成として1950年に著した“Early Child Education & the Waldorf School Plan.”の「序言」に寄稿している。そこには、キムバートンの学校では6年間の運営指導に当たったこと、アデルフィ大学構内に幼稚園を開き、これが「アデルフィ・カレッジ附属ヴァルドルフ・モデルスクール」の基となったと述べている⁵¹。その後1957年にグルネリウスはフランスに戻り、パリ近郊のシャトゥー (Chatou) に「エコール・ペルスヴァル」 (École Perceval) ⁵²の附属幼稚園を創設した⁵³。

グルネリウスの幼稚園設立の活動はここで終わり、『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』における「訳者あとがき」において高橋弘子は、1979年4月16日付の手紙をグルネリウスからもらっていることを内容と共に明らかにし⁵⁴、また、「今年八十六歳の高齢ながら、いつまでも著者はドルナッハの丘の上で、静かに、しかし内的に活発な余生を送っています」⁵⁵とその後の生活を記している。1989年に94歳で亡くなったグルネリウスであるが、同志であるハッターマンも2003年に94歳で亡くなっているのは、二人の運命的な出会いを感じさせる。

グルネリウスがシュタイナーに出会った1914年から1989年に亡くなるまでの上記流れをハッターマンの動きと対応させた表として以下に示す。

表 グルネリウスとハッターマンの経緯

年	Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius (1895.6.15－1989.10.3)	Klara Hattermann (1909.5.21－2003.9.1)
1914	・ボンにおいて「コメニウス・幼稚園教師ゼミナール」修了。 ・シュタイナーに会うためにドルナッハに向かう。	
1915 ～ 1916	・ドルナッハにてゲーテアヌムの建設を手伝う。	
1916 ～ 1917	・ベルリンの「ベスタロッツ・フレーベル・ハウス」で学修。 ・シュタイナーからヴァルドルフ学校教師陣へ加わる要請を受ける。	
1918	・「ベスタロッツ・フレーベル・ハウス」修了及び資格取得。 ・故郷フランスに戻る。	
1919	・シュツットガルトへ向かう。	
1920	・新政府による学期の移行（4月から9月）により半年間幼児教育を行う。 ・1919年～1926年：自由ヴァルドルフ学校において教育に従事する。	
1924	・ヘルベルト・ハーンが幼稚園園舎建築に着手する。	
1925	・シュタイナー没	
1926	・園舎完成 ヴァルドルフ幼稚園開園	
1929	・ハッターマンと出会い、共に幼児教育に当たる。	・ヴァルドルフ幼稚園にグルネリウスを訪れる。
1931		・ハノーバーに幼稚園を開園
1932	・“Das Kind im Kindergarten der Freien Waldorfschule.”を執筆する。	
1934－1945 アドルフ・ヒトラー総統		
1938	・シュツットガルトとハノーバーのヴァルドルフ学校がナチスにより閉鎖される。	・ハノーバーの幼稚園は閉鎖を免れ、1931年から1941年まで続く。
1939－1945 第二次世界大戦		
1940	・ペンシルバニア州キムパートンのマイリン農場にシュタイナー学校及び幼稚園を創設（のちに大学も創設）。6年勤務する。	
1941		・ハノーバーの幼稚園がナチスにより閉鎖され、ドレスデンへ逃れる。 ・ドレスデンにて地下室に小さな幼稚園を開園する。
1946		・ハノーバーに戻り幼稚園を再開する。

1948	・ロングアイランド州ガーデンシティにあるアデルフィ大学にて、H・フォン・パラヴァレ教授と共に「ヴァルドルフ・モデルスクール」とその附属幼稚園を創設する。	
1950	・『幼児教育とヴァルドルフ学校計画』英文で出版する。	・幼稚園教師の集会に参加する。
1953		・ハノーバーの新園舎完成
1957	・パリ近郊のシャトゥーに「エコール・ベルスヴァル」の附属幼稚園を創設	
1964	・『幼児教育とヴァルドルフ学校計画』のドイツ語増補版刊行する。(翻訳版『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』)	
1969		・「国際ヴァルドルフ幼稚園協会」を設立
1979	・高橋弘子へ手紙を送る。(4月16日付)	
1981	・ドルナッハ在住(86歳) ドルナッハの丘の上で余生を送る。	
1989	・没(94歳)	
2003		・没(94歳)

3. まとめ

本稿では、ヴァルドルフ幼稚園の設立者であるエリザベス・グルネリウスが、1914年にシュタイナーに会うためにドルナッハを訪れてから、1989年に94歳にてドルナッハで亡くなるまでの75年間の歩みの整理を試みた。先行研究の少ない中、限られた資料を用いての整理に終始したが、その中でも新たな情報を得ることができた。

その第一は、グルネリウスが1914年に自らの意志でドルナッハにいるシュタイナーを訪ね、一年半後にはシュタイナーの教育構想に加わり、その後亡くなるまでシュタイナーの教育観を自ら実践して、世界へと広げる働きをしていた点である。グルネリウスが自らの意志でシュタイナーを訪ねたということは、シュタイナーの人智学思想や教育観・人間観に対する共感と信頼があったからこそと言える。ハワード(2005)は、グルネリウスがシュタイナーの『神智学』を読み、ゲーテアヌムの建築を手伝う決意をしたと述べている⁵⁶。しかし、グルネリウスはどのような経緯でシュタイナーを知り、『神智学』にたどり着いたのかは定かではない。グルネリウスはシュタイナーに出会う前に「コメニウス・幼稚園教師ゼミナール」で養成課程を修め、シュタイナーと出会った後も「ペスタロッチ・フレーベル・ハウス」において再び修めている。コメニウス・幼稚園教師ゼミナールの学びの中で、グルネリウスはシュタイナーについて知り得た可能性もある。グルネリウスがこれらの課程を通しどのような教育観や保育観を身に付けたのか、また、両課程の内容や制度等についての調査は、別稿にて試みたいと考える。

そして、二つの養成課程を修了しグルネリウスが選んだ道は、シュタイナーの教育観に基づく保育実践であった。グルネリウスはシュタイナーから幼児教育を依頼されたときに戸惑っているが、それは、これまでに修了した課程において「模範と模倣」、「瞑想による実践」という方法は、グルネリウスにとって新たな教育観であり実践方法であったからである。グルネリウスがシュタイナーと出会ってから、シュタイナーが亡くなるまでの時は11年と長くない。グルネリウスはシュタイナーからどのような方法で、どのような内容を学んだのか、この11年間に於けるグルネリウスとシュタイナーの関わりについて示す資料を収集し、追究したい。グルネリウスは、1950年に『幼児教育とヴァルドルフ学校計画』を、1964年には同書のドイツ語増補版刊行（翻訳版『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』）を執筆している。グルネリウスが著した本書がヴァルドルフ幼稚園の教育実践の基本として現在も位置付けられ、多くの保育者に学ばれている。グルネリウスの記述からシュタイナーの教育観を読み取り、ヴァルドルフ教育の本質を改めて分析する必要がある。

グルネリウスの生きた時代は、ナチス勢力が支配的なドイツ社会であり、ヴァルドルフ幼稚園と自由ヴァルドルフ学校は閉鎖に追い込まれる中、グルネリウスはヴァルドルフ教育を外へと広げていたこともわかった。グルネリウスはアメリカ・ペンシルバニア州キムバートンのマイリン農場にシュタイナー学校及び幼稚園を設立し、6年間勤務していた。グルネリウスに誘いをかけたマイリンという人物についてこれまで取り上げた論考は見当たらなかったが、ニューヨークタイムズ紙の一記事に、マイリン夫人の死去を報じる記事から、「キムバートン農学校（Kimberton Farms School）」を設立したことや、長老派の病院、アデルフィ大学、アーサイナス大学に関わっていたことが示されていた。記事には、キムバートン農学校と表記されているが、おそらくグルネリウスが関わったヴァルドルフ学校とヴァルドルフ幼稚園ではないかと推察された。現在は、「Kimberton Waldorf School」という名称において農場に隣接し学校が設置されていることをホームページから確認することができる⁵⁷。1948年には、ロングアイランド州ガーデンシティにあるアデルフィ大学にて、H・フォン・バラヴァレ教授と共にヴァルドルフ・モデルスクールとその附属幼稚園を創設した。アデルフィ大学は1896年創立したロングアイランド州最古の大学で、現在も多くの学部と豊かな学びが用意されている大学である。現在ヴァルドルフ学校は、「WALDOLF SCHOOL of GARDEN CITY」としてホームページもあり⁵⁸、学校の様子やカリキュラム、学びの特徴等について知ることができる。今後、詳しい内容について調査を進めていきたい。グルネリウス62歳の1957年には、故郷フランスのバリ近郊シャトゥー（Chatou）に「エコール・ペルスヴァル」（École Perceval）の附属幼稚園を設立した。エコール・ペルスヴァルは現在も存続しており、幼稚園から高等学校まである。エコール・ペルスヴァルについても設立の経緯やグルネリウスの取り組み、現在の教育実践、教育内容等について今後調査を続け、フランスにおけるヴァルドルフ幼児教育の位置づけについても検討していきたい。

第二は、グルネリウスに関わる人の存在についてであった。一人は、自由ヴァルドルフ学校の教

員であるヘルベルト・ハーンが存在である。シュタイナーの幼稚園設立の願いは、財政的・環境的・人的問題から小学校教員になかなか届かなかったが、ヘルベルト・ハーンの決意により幼稚園設立計画が一気に動き出す。園舎の建設から手掛け1926年に完成するが、その時シュタイナーは亡き存在であった。シュタイナーは小学校教員に対し、幼稚園設立に向けてどのような働きかけをしていたのだろうか。そしてヘルベルト・ハーンは、シュタイナーのどのような言葉に納得し、取り組む決意をしたのだろうか。このようなやり取りの記録を入手することができれば、当時の教員が持つ幼児教育観やヴァルドルフ学校の体制等が明らかになると思われる。

もう一人は、クララ・ハッターマンとの出会いである。それは、幼稚園設立から3年後の1929年であった。2年後の1931年には、ハッターマンはハノーバーに幼稚園を設立しているので、グルネリウスとハッターマンがシュツットガルトにおいて共に保育に当たったのは2年間という短い時間である。この2年間の二人による保育実践を伝える資料を収集できれば、草創期ヴァルドルフ幼稚園の実態がより一層見えてくるだろう。共に過ごした時間は短い、ハッターマンは、戦禍による避難を余儀なくされる中、ハノーバーやドレスデンへと移動する中でもヴァルドルフ幼稚園を立ち上げ、保育を続行していたところに幼児教育にける熱意を感じる。また、ハッターマンの功績は、教員養成に力を入れたことと、ヴァルドルフ教育を組織的に運営するための協会設立へと向かわせた点にあると言える。協会は現在にも引き継がれており、我が国においても教員養成が組織的に行われるようになってきている。ハワード（2005）は、グルネリウスとハッターマンがヴァルドルフ幼児教育運動の先駆者と見なしていたが、二人の途切れることのない保育実践と世界的な広がり活動を捉えると十分に納得できる。

ヴァルドルフ幼稚園の草創期におけるシュタイナーとグルネリウスの出会いから、ヘルベルト・ハーンやクララ・ハッターマンとの出会いと園の設立について整理を試みたが、さらに具体的な状況を把握するための資料が必要であることが如実になった。今後も引き続き資料収集を進め、草創期のヴァルドルフ幼児教育の実態を明らかにしていく中で、現在との比較も行い、ヴァルドルフ幼児教育に対する展望を捉えていきたいと考える。

註

- 1 シュタイナーが創設した自由ヴァルドルフ学校の特徴は、「人智学（Anthroposophie）」に基づき、人間は変容的発達を遂げる存在として捉え、芸術的な要素を取り入れて教育実践を展開した点にある。シュタイナーは、変容体としての人間を「物質体（physischer Libe）」、「エーテル体（Ätherleib）」、「アストラル体（Astralleib）」、「自我（Ich）」から捉え、7年周期（誕生から7歳頃、7歳頃から14歳頃、14歳頃から21歳頃）にふさわしい教育を、「意志」、「感情」、「思考」の発達と対応させた。実践面で特徴的な点は、8年間の一貫担任制であること、同一科目を約一カ月にわたって集中的に学習する「エポック授業」を取り入れていること、身体芸術である「オイリュトミー」が全ての学年で必修科目となっている点などが挙げられる。
山崎英則、片上宗二編、2014、『教育用語辞典』、ミネルヴァ書房、pp.264-265
- 2 エミール・モルトは、ヴァルドルフ・アストリア煙草工場（Waldorf-Astoria-Zigarettenfabrik）の社長

であり、ドイツの商業顧問官であった。人智学を学んでおり、工場の労働者や職員の人間としての成長や教育に高い関心を持っていた。シュタイナーに教育を依頼したモルトは、学校建設の用地や資金を調達し、学校建設が進められていく。ビュッテンベルクの学校法に基づいた統一学校としてシュツットガルトに自由ヴァルドルフ学校を開校した。

広瀬俊雄、2009、『シュタイナーの人間観と教育方法—幼児期から青年期まで—』、ミネルヴァ書房、pp.24-25

- 3 1919年8月20日（連続講演前夜）、8月21日から9月5日までの17日間にわたりシュタイナーにより講演された内容について、次の3巻に収められている。

- ①ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、1985、『ルドルフ・シュタイナー教育講座第Ⅰ巻 教育の基礎としての一般人間学（Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik）』、創林社

- ②ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、1989、『ルドルフ・シュタイナー教育講座Ⅱ 教育芸術1 方法と教授法（Eraiehungskunst Methodisch-Didaktisches）』、筑摩書房

- ③ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、1999、『ルドルフ・シュタイナー教育講座Ⅲ 教育芸術2 演習とカリキュラム（Eraiehungskunst Seminarbesprechungen und Lehrplanvorträge）』、筑摩書房

- 4 我が国では、シュタイナー幼稚園と呼ばれることが一般的だが、世界的にはヴァルドルフ幼稚園と呼ばれることが多い。世界のヴァルドルフ学校のリストが収められている、Waldorf World List 2018には、ヴァルドルフ幼稚園（幼児教育施設）として、67カ国1817園が掲載されている。

URL:https://www.freundewaldorf.de/fileadmin/user_upload/images/Waldorf_World_List/Waldorf_World_List.pdf（2018年9月5日現在）

- 5 杉岡幸代、2016、「シュタイナー幼稚園の黎明期」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第56集、pp.122-123

- 6 近藤千草、2018、「シュタイナー幼児教育の広がり」と研究動向に関する考察」、『川村学園女子大学子ども学研究年報』、第三巻第一号、川村学園女子大学子ども学研究所、p.84

- 7 掲載されている7本の論文

- ① Erisabeth Grunelius, Early Child Education & the Waldorf School Plan. 1950

（邦訳 E・M・グルネリウス、高橋巖・高橋弘子訳、1999、『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』、フレーベル館）

- ② Erisabeth Grunelius, Das Kind im Kindergarten der Freien Waldorfschule. 1932

- ③ Manfred Berger, Frauen in der Geschichte des Kindergartens. 1995

- ④ Manfred Berger, Elisabeth von Grunekius. 2013

- ⑤ Helmut von Kùgelgen, Die erste Waldorfkinderkartnerin. Elisabeth von Grunelius. 1989

- ⑥ Melaniel Gro ß kurth, Waldorfpädagogik und frühe Kindheit. Der Anteil Elisabeth Grunelius an der Konzipierung und Realisierung. 2004

- ⑦ Susan Howard, The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement. 2005

- 8 Erisabeth Grunelius, Das Kind im Kindergarten der Freien Waldorfschule. 1932

Manfred Berger, Frauen in der Geschichte des Kindergartens. 1995

Manfred Berger, Elisabeth von Grunekius. 2013

Susan Howard, The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement. 2005

- 9 Susan Howard, 2005, The First Waldorf Kindergarten. The Beginning of Waldorf Early Childhood Movement, p.21

- 10 前掲書9）p.21

- 11 高橋弘子、1995、『日本のシュタイナー幼稚園』、水声社、p.28

- 12 例えば、次のような文献に、乳幼児期の捉え方や教育の内容・方法が触れられている。

- ①『霊学の観点からの子どもの教育』

（Die Erziehung des Kindes von Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft）

- ②『人間理解からの教育』（Die Kunst des Erziehens aus dem Erfassen der Menschenwesenheit）

③『オックスフォード教育講座 教育の根底を支える精神的・心意的な諸力』

(Die geistig-seelischen Grundkräfte der Erziehungskunst<oxford-Kurs>)

13 前掲書9) p.21

14 前掲書9) p.21

15 杉岡幸代、2016、「シュタイナー幼稚園の黎明期」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第56集、p.124

杉岡は論中において二種類の表現、「コメニウス・幼稚園教師ゼミナール」(p.124)、「コメニウス・幼稚園ゼミナール」(p.130)を用いている。本稿では、前者を採用することとする。

16 E・M・グルネリウス、高橋巖・高橋弘子訳、1999、『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』、フレーベル館、裏表紙著者略歴

17 前掲書9) p.21

18 前掲書9) p.21

19 前掲書15) pp.130-131

20 前掲書15) p.125

21 岩崎次男編、1995、『幼児保育制度の発展と保育者養成』、玉川大学出版部、p.175

22 前掲書16) p.125

23 前掲書9) p.22

24 前掲書9) p.22

グルネリウスは幼稚園を引き受ける不安について、“Today it is perhaps difficult to imagine a time when no one had worked consciously with the imitative capacities of the child.”とシュタイナーが重視する子どもの模倣力を意識した支援を実践していくことに対する不安を述べている。

25 前掲書9) p.22

26 前掲書9) p.22

27 前掲書9) p.22

28 前掲書9) p.22

29 前掲書15) p.126

30 ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、1999、『ルドルフ・シュタイナー教育講座Ⅲ 教育芸術2

演習とカリキュラム (Eraiehungskunst Seminarbesprechungen und Lehrplanvorträge)』、筑摩書房 p.248

講習会に参加した人とは次の人物である。

女性：マリー・シュタイナー、モルト夫人、ケーゲル、フォン・ミルバッハ、ヘルマン、C・フォン・ハイデブランド、ドルフス、ラング、ミータ・ヴァラー、キーザー (10人)

男性：エミール・モルト、エールシュレーゲル、ケルナー、ヴァルター・ヨハネス・シュタイン、パウマン、ガイヤー牧師、ヘルベルト・ハーン、ルドルフ・マイヤー、シュトックマイヤー、R・タイヒラー、L・ノル博士、A・シュトラコシュ、ヴォルファー (13人)

31 前掲書2) p.25

32 前掲書9) p.21

33 前掲書16) p.15

34 前掲書9) p.23

35 前掲書9) p.23

36 前掲書9) p.23

37 Manfred Berger, “Zur Geschichte und Theorie des Waldorfkinder Gartens”

URL:<https://www.nifbe.de/component/themensammlung?view=item&id=799:zur-geschichte-und-theorie-des-waldorfkinder-gartens&catid=37> (2018年11月8日現在)

38 前掲書9) p.23

39 前掲書9) p.23

40 前掲書16)

41 The New York Times 1972年1月4日 PHILADELPHIA, Jan. 3 (AP)

URL:<https://www.nytimes.com/1972/01/04/archives/mrs-h-a-w-myrin.html>

（2018年11月7日現在）

42 前掲書9）p.23

43 マイリン社ホームページ「The Myrin Institute」About the Myrin Institute

URL: <http://myrin.org/about.html>（2018年11月7日現在）

44 前掲書9）p.23

45 前掲書37)

46 前掲書9）p.24

47 前掲書9）p.24

「国際シュタイナー／ヴァルドルフ幼児教育協会」(IASWECE) URL:<http://iaswece.org/>

（2018年9月7日現在）

48 前掲書9）p.23

49 アデルフィ大学 (Adelphi University 1896-) は、ニューヨーク近郊のガーデンシティにあり、アメリカで初めて心理学の専門系大学院を設置したことや、教養課程を重んじている大学として知られている。アデルフィ大学ホームページ URL: <https://www.adelphi.edu/>（2018年9月7日現在）

50 前掲書16)

51 前掲書16) p.1

52 ÉCOLE PERCEVAL ホームページ URL: <http://www.ecoleperceval.org/>（2018年11月8日現在）

53 前掲書16)

54 前掲書16) pp.127-128

55 前掲書16) p.126 「今年」とは1981年を指す。

56 前掲書9）p.21

57 Kimberton Waldorf School ホームページ URL:<https://kimberton.org/>（2018年11月22日現在）

58 WALDOLF SCHOOL of GARDEN CITY ホームページ URL:<https://www.waldorfmiddleschool.org/>（2018年11月22日現在）

参考文献

岩崎次男編、1995、『幼児保育制度の発展と保育者養成』、玉川大学出版部

E・M・グルネリウス、高橋巖・高橋弘子訳、1999、『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』、フレーベル館

近藤千草、2018、「シュタイナー幼児教育の広がりと研究動向に関する考察」、『川村学園女子大学子ども学研究 究年報』、第三巻第一号、川村学園女子大学子ども学研究所

杉岡幸代、2016、「シュタイナー幼稚園の黎明期」、『大阪キリスト教短期大学紀要』第56集

Susan Howard、2005、The First Waldorf Kindergarten.The Bginning of Waldorf Early Childhood Movement

高橋弘子、1995、『日本のシュタイナー幼稚園』、水声社

Manfred Berger、“Zur Geschichte und Theorie des Waldorfkindergartens”

URL:<https://www.nifbe.de/component/themensammlung?view=item&id=799:zur-geschichte-und-theorie-des-waldorfkindergartens&catid=37>

広瀬俊雄、2009、『シュタイナーの人間観と教育方法—幼児期から青年期まで—』、ミネルヴァ書房

山崎英則、片上宗二編、2014、『教育用語辞典』、ミネルヴァ書房

ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、1985、『ルドルフ・シュタイナー教育講座第Ⅰ巻 教育の基礎としての一般人間学 (Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik)』、創林社

ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、1989、『ルドルフ・シュタイナー教育講座Ⅱ 教育芸術Ⅰ 方法と教授法 (Eraiehungskunst Methodisch-Didaktisches)』、筑摩書房

ルドルフ・シュタイナー、高橋巖訳、1999、『ルドルフ・シュタイナー教育講座Ⅲ 教育芸術2 演習とカリキュラム (Eraiehungskunst Seminarbesprechungen und Lehrplanvorträge)』、筑摩書房

参考資料

アデルフィ大学ホームページ URL: <https://www.adelphi.edu/>
ÉCOLE PERCEVAL ホームページ URL: <http://www.ecoleperceval.org/>
一般財団法人日本シュタイナー幼児教育協会ホームページ「国際シュタイナー/ヴァルドルフ幼児教育協会」(IASWECE) URL: <http://iaswece.org/>
Kimberton Waldorf School ホームページ URL: <https://kimberton.org/>
マイリン社 (The Myrin Institute) ホームページ URL: <http://myrin.org/about.html>
The New York Times 1972年1月4日 PHILADELPHIA, Jan. 3 (AP)
URL: <https://www.nytimes.com/1972/01/04/archives/mrs-h-a-w-myrin.html>
WALDOLF SCHOOL of GARDEN CITY ホームページ URL: <https://www.waldorfmiddleschool.org/>

謝辞

2018年4月より1年間、青山学院大学人間教育科学部 河本洋子教授のご指導により、シュタイナー幼児教育に関する研究を進めることができましたこと、心より感謝申し上げます。